46.

9784844137795

ISBN978-4-8441-3779-5
C0090 ¥1900E

定価 本体1,900円 +税

雷鳥社

1920090019005

誰もが知っている文学作品をさまざまな角度から解釈し、新しい読解の方法を身につける。ロラン・バルト、デイヴィッド・ロッジ、ノースロップ・フライなど、著名な批評家や小説家の言説を用いながら、日本の近代〜現代文学、海外文学作品を本格的に分析。あらゆる「読みの可能性」を実感し、文学作品の奥深さに触れる。

5179

小林真大（こばやし・まさひろ）

山形県生まれ。早稲田大学国際教養学部卒業。IB JAPANESE オンラインスクール代表。現在インターナショナルスクールで国際バカロレアの文学教師を勤める。また、オンラインで海外子女への指導も行っている。著書に『文学のトリセツ―「桃太郎」で文学がわかる！』（五月書房新社、2020年）、『「感想文」から「文学批評」へ：高校・大学から始める批評入門』（小鳥遊書房、2021年）、『生き抜くためのメディア読解』（笠間書院、2021年）など。

ホームページ：https://www.ibjapanese.com/

やさしい文学レッスン
――「読み」を深める20の手法

2021年9月10日初版第1刷発行

著者　小林真大

装画・挿絵　西村隆史
ブックデザイン　谷元将泰
編集　甲斐菜摘
校正・校閲　株式会社鷗来堂
印刷　シナノ印刷株式会社
発行者　安在美佐緒
発行所　雷鳥社
〒167-0043　東京都杉並区上荻2-4-12
TEL 03-5303-9766 / FAX 03-5303-9567
http://www.raichosha.co.jp
info@raichosha.co.jp
郵便振替　00110-9-97086

ISBN 978-4-8441-3779-5 C0090
©Masahiro Kobayashi / Raichosha 2021 Printed in Japan.

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

いて教えられるべき事柄なのではないでしょうか。国語の現場ではむしろ、文学の読み方を教えることこそが、本来あるべき授業の姿であると言えます。

また、そうした読み方を学ぶことは、大学で文学を研究しようと思っている学生にはもちろん、小説をもっと深く味わいたいと思っている数多くの小説愛好家にとっても有益になるはずです。何よりも、そうしたさまざまな読み方を味わうことこそ、私たちの人生を豊かにすると言えるのではないでしょうか。

本書では二〇個のレッスンを通して、読書への手ほどきを行い、読者のみなさんに文学への「入り口」を提供しています。思想家ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの比喩を借りるならば、この本はいわば、文学という高みにのぼるためのハシゴのようなものと言っても良いでしょう。文学についてより専門的な知識を得たいと願うようになったら、ぜひこの本を次の世代に託し、自らはさらなる高みにのぼっていただければと思います。

私自身、この本を著すことで、多くのことを学ぶことができたように感じています。最後に、この貴重な機会を与えてくださった雷鳥社の方々、とくに編集者の甲斐菜摘さんに心から感謝の意を伝えます。

二〇一一年七月一一日　小林真大

おわりに

この本を書くにあたって、文学をより深く味わうために必要な概念を説明し、例証し、なぜそうした概念が重要な役割を担っているのかについて、読者に解き明かすように努めました。本書は文学の入門書として、なるべく簡潔かつ明快に書くことを目指していますので、特別な専門的知識がなくても楽しく読めるようになっています。

こうした本を書こうと思った背景には、昨今の国語教育に対する危機感がありました。文学者の石原千秋は、『国語教科書の思想』の中で、戦後の国語教育が教訓めいた道徳教育になっていることを指摘しています。授業では文学作品に対する批評的な読みは行われず、小説を読む技術も積極的に教えられることはありません。むしろ、作品に含まれている作者の意図や訓話を読みとるだけの自己形成の場として国語が利用されているのです。

もちろん、道徳を身につけることは、これから社会で活躍する若い人にとって有益であることは言うまでもありません。しかしながら、それはあくまでも道徳や倫理の授業にお

という指摘もあります。[*19]

このように、すぐれた物語の多くは「解決不可能」な問題をテーマに据えているため、読者は「これで終わりだ」という終結感を感じることがなかなかできないかもしれません。しかしながら、そうした「不完全な」作品こそが、私たちの「生の重み」に耐えうるだけの深さを秘めていると言えるのです。

＊15　同上、一五三頁。

＊16　三島由紀夫は『豊饒の海』入稿日の一九七〇年一一月二五日に陸上自衛隊東部方面総監の益田兼利を監禁し、自衛隊員に決起を呼びかける演説を行ったのち、割腹自殺した。

＊17　石原昭平「作品の結末」『日本文学（22）』日本文学協会、一九七三年、二九頁。

＊18　川端康成は一五歳になるまでに肉親をすべて亡くし、孤児となった。その後は常に心を閉ざして他人の顔色をうかがうような生活をする一方で、そのようなひがんだ自分の性格を嫌い、自らを強く責めていたといわれている。

＊19　梅澤亜由美「『千羽鶴』から『波千鳥』へ――川端康成がめざしたもの」『日本文學誌要』法政大学、一九九八年、五七～六〇頁。

> 作品の中の諸人物やいろいろの問題は、作品そのものは終ってしまっても、そのままわれわれの現実の中に入ってきて、われわれの現実の一片として生き続けて行くことができる［中略］私はこの未完了性――われわれの生もその志向するところから言えばつねに未完了状態にある――ということを文学の最大の形式的特性と見たい。[*15]

文学は、私たちの人生と隣り合わせにあります。作品を読み終わった後も、それをどう解釈すべきかについて、ずっと考え続けなければなりません。また、生きていくうちに自分の世界観が変わり、それまで作品に対して持っていた考えが一変することもあるでしょう。

実のところ、「文学が現実世界と連続している」ことを一番強く意識していたのは、もしかすると作家自身かもしれません。三島由紀夫は、小説『豊饒の海』の入稿日に、陸上自衛隊の市ヶ谷駐屯地で割腹自殺しました。[*16] そこには、文学作品が決して筆を置いたと同時に「終わる」ものではないという強い意識があったのかもしれません。[*17] さらに、川端康成の小説『千羽鶴』は、一応作品としては完成していますが、主人公が持つ「罪の意識」は解消されていません。[*18] これは川端自身が、自分の「罪の意識」に苦しんでいたからである

結末を語るうえで最後に考えたいのは、そもそも物語に終わりはあるのかという点です。例えば、ドイツ文学者の高橋義孝[*13]は、物語の結末について次のように述べています。

> 文学作品は芸術作品のような意味で「終って」はいないので、また「終る」ことができないので、また元来「終る」ものではないので、それであるからこそ却って「終り」という符牒をぶら下げているのではないか。[*14]

なぜ彼は文学に「終わり」がないと考えたのでしょうか？　高橋は続けて次のように語っています。

＊11　小林好和「授業場面における理解過程に関する研究（7）―文学作品の『一次読み』における予期推論と原文展開の統合について―」『札幌学院大学人文学会紀要（83）』札幌学院大学、二〇〇八年、一三〇頁。

＊12　青砥、前掲書、七頁。

＊13　ドイツ文学者（一九一三～九五）。深層心理学を援用した文学理論を完成させた。ほかに評論『森鴎外』、『近代芸術観の成立』など。

＊14　高橋義孝『文学非芸術論』新潮社、一九七二年、一五一頁。